



# 探梅や 遠き昔の 汽車にのり 山口誓子

膨らみ始めた木の芽に、そして伸びていく日脚に春の足音が聞こえてくる季節です。

自然に恵まれたわが国では、花木を觀賞して楽しむ言葉がいろいろとあります。

例えば桜は花見と言ひ、秋は紅葉狩り、そして梅なら探梅です。四季のある日本に生まれた私たちの生活は自然とともに流れています。

2月如月（こきわら）。日一日と春めく頃ですが、春は曆の上だけで、寒さは厳しく草や木の芽も春を待ちわびているようです。

「二月は逃げて走る」とか「二月ひと月は小糠（こぬか）三合で暮らす」のことわざがあるように、あつという間に過ぎてしまふ慌ただしい月でもありません。

稻荷神社（いなり）の祭礼である初午（はつご）祭、釈迦入滅（しやくか）の法会涅槃会（ねはんえ）などの行事が行われのも2月です。

「冬来りなば春遠からじ。」北の地域ではまだ雪との格闘

が続いていますが、南からは梅の開花便りが届いています。これから長い列島を時間をかけて春が上がっていきます。

魚見岳の桜の木々の色合いも変化し、黒つぽかった寒色系の幹や枝がいつのまにか薄茶っぽい暖色系になってきています。近寄って見ると、かわいらしい花芽があちこちに吹き出し、日々膨らみを増しているようにも思われます。

「休眠打破」という言葉があります。

前年の夏に形成された桜の花芽がいったんは「休眠」状態となり、冬の低温にさらされることで眠りからさめ、開花の準備を始めるという意味です。面白いことに、この低温期間が半端だといひ花芽がでさないそうです。きっちり一定期間寒さに耐えねば美しい花は咲かないようです。

梅は寒さの極まる時節、百花に先駆けて咲きます。その早咲きを山野に探るのが探梅

という言葉ですが、立春を過ぎれば探梅も観梅に変わります。

探梅は「一輪ほどのあたたかさ」をいとおしみ、観梅は盛りの色香を愛でるといふ微妙にして妙な季節の移ろいを感じさせる言葉です。

この時季は子どもたちにとっては試験の時です。頑張り受験生。あとひと踏ん張り。雪雲の切れ間から顔をのぞかせる太陽は、思いの外まぶしい光を放っています。



指宿市長  
豊留悦男